



朝
夕
日記

後
篇

四

特別
~ 13
4268
9



朝顔日記卷之七

故芝叟遺話

柳浪

著

第十七回

大内介殿いづ思召けん。遽に駒澤が閉門を免とを冷泉帯刀
 小敷け置せたやふ。然る那の遺失を責問とべき。狗藤内二夜
 獄を越えて晦跡たり。帯刀等不意に突一驚して。慌忙しく
 幾隊の快手を走らせ。四面八隅草分ちて。搜捕せける。さて
 この緊要の遺東西といふハ。真武聖帝の尊像より。泰くも
 當家の曩祖琳聖太子。高麗の國より齋せ渡来たまひし。より
 長く家の守護神と崇へたまふ。從來奇異の靈験在に。より
 時とぬく紫禁より大内氏より鳳詔くだり。即這尊像と廟堂

高
美
堂



高美堂

〇一

設けらる。妙見靈符の大醮を做さしつたまふ。その攘法は代々
當家の主たる者。修め来たるふとくかや。まうあるふ。先項那の尊
像の一軸失て。何者の所為とつふふと志らざる。尚むふのこと
禁廷に洩聞えぬ。由くまき家の大事ならんと長臣の們
眉なひとら。各安と心りぬ。先是駒澤に寛の難題と云
かけたる修驗伽羅羅院といふ。この國の僻處三田尻と
いふ地方の民ぬるが。一個の母親は事て至孝ぬることいふ
むりぬ。こまが兄弟徳兵衛と喚做者を隣郷ぬる做
敗布的何某が入贅はくハハハハ。母は生得ていと古怪き
好潔の毛病ありて。平素まづう洒掃のまこととくし。こま
飲食の類もいさう不如意ことあるを。そのまゝ嘔逆成

發して。終日絶穀するもまゝ。加羅羅院は深く是と
歎き。只顧母の菜舞掃除ハ勿論飲食もんどかのかさり
叮嚀は物一つ。されど自来その家貧しく母と豊に飼養
ことあたはず。母の嘔噦發るごとく涙と流し。自己が孝養
の暖飽不得と歎息せり。おほよそ知音の人と對時ハ滿腔
子に呻める遺憾を洩し。あはま一二百兩の金子もかぶ母と
安樂な養はんものと。今もあはれ大金と損して。人命を
購むる人もあらば己の命と交易たさともぬ。といふと
皺面よぞ語る。さるほど山岡玄番元ハ己が大聖の妨
るす。駒澤次郎左衛門と付て墜さんと多が計較てあり。さる
先是在京の特色慾の為に散財出醜。荻野祐仙自光山岡が

先是在京の特色慾の為に散財出醜

郎も親炙附翼せしが。忽日来て物の序は道やう。世は
希有の望せら獸呆し侍るき。近来小的許は請治来る
三田尻の者が申すふハ。それが街坊は伽縷羅院といふ修験
ありて。そふとと孝心の者侍るが。自己貪しく母親と養ふ
不如意あるふより。自然好事の人ありて大金もて交易人と
望まばそのまき性命と沽んと申すより承はてきと無心の
雑話と心ある山岡云番聞より計頭は心頭は上まらり
あは最屈竟の事ありと。隨即祐仙と閑處はまひき。何事
密語とぞ取ける。舊這の祐仙も。駒澤と戀の敵と深く嫉む。
蚤より山岡が逆謀は荷擔せし。今山岡が吩咐とバいと
容易領承ぬ。わけて祐仙ハ誥且尊食て。山口の府下とたち
いで只管西と望んて走どるが。未牌はいとや三田尻の
ぬる出村といふ地方は。鑠とある茶店ふたりより。憩息其許
の店小二と央る三田尻の熟人へ折簡は齋せ差し。幸
宿は在ける。待程しむぬ。那の伽縷羅院ある者出来ぬ
祐仙ハ款待し。在つと。酒とら酒ねど請め。いと寛語たふ
うへ。和僧ハ憑金よて命を沽ると聞侍しが。そはいく實
定は侍る。今爰は百兩の金子あり。菲儀よても承引た
まは商量し。むいぬと。伽縷羅院聞て。こハ從來望はる
百金と。賜らば如何。愚僧が狗命と購申と。いといと
苦もかけ。允容なれば。祐仙ハ最早く事就と悦び。和僧の命
と買得由ハ緊隠密よて壁耳と憚る。そハ施主より直は聽る

べしといとさらば斤時も早く伴ひ歸ると。忙ハ一たつる。伽
縷羅院とまづその金子と收落申し一回弊院に歸り
舎弟の百般付属とき、闔家の眷もこの金の出處に
恠まざるやうに申しきりせ。直回して来りぬるといふ。祐仙
いとどより意東西ぬまばその翻悔せんことと放心不下て
半晌猶豫状ぬる。伽縷羅院熟視て、今日ふ人邂逅
夙志が遂たる。自然變卦もも遇んことほどくあやぶ
まをさら店小二を呼たてて道やう。愚僧此の仔細ありて
那の醫師殿より為替の金子を拿歸るなり程ぬく又
来りてその事と辨し待りぬ。露むりとも齟齬いとふらハ
す。霎時往來の間はどハ、和主ことと為證てたぐぬと諒
托けるよ。店小二ハ恒に伽縷羅院が篤實に熟識居まハ
快よく允るひ。祐仙は對ひて種く附語とぬを小し。祐仙
も只得承引てがり。伽縷羅院ハ祐仙が遊せる金子と懐
きてこの茶店をたち出直に本院よりより来りて道るはさて
も今日ハ造化なることこそあも。待ハ甘露の日和ありと
ごし。今般皇都の土御門家より扶桑六十餘州の陰陽師
どもの系譜御糺しありて。胡論ぬるものハ没入らま。正道ぬる
ものハ牌符と下とろ。小或の吹嘘も由不思議と市看顧し
還る。我ハ鎮西道の査差に赴るべき余の家をさる。小
はきさる御幹よて還る召ま。唯今より鳳刺と指て起程侍
ぬ。調度どもハ日後申し下とべし。一囊の百金と居めハせ

たる徳兵衛は通し、この支度金ハ汝ハ汝ハ付與ふくど。起先掃
人へ却不自由とせまらせし代り、何んぞろも托れ母へも告別と
東西とも買へて請まいらせよとねんごろも托れ母へも告別と
ねし。上洛せんハ、懸の二光とも送る人、好く信を在せ。こ
發跡て僧都ともねりて發旺歸省に待たまへと、口裏ハいへ
ど肚裏ハいへ、今世のこれと思へ、涙盤渦来て胸うら潰
たまど、不悟まゝと衣紋刷くして紛らしつ、母も餘波ハ惜し
られども、愛子の出世と聞らるゝともあらハ早く都より還り
来て、老ヶ倚門心と慰よと、離の盃斟ハハ、大家啓行と見
難し、その後加縷羅院ハ金玉の由岡ヶ命と守り、駒次
小寛といひつけ、漂ヶ分説の滅口し、舌噛切て死なるハ財の料ふ

いひるがら。無慙といふも、惹るる三田尻るる母ハかくといひぞ、おぼ
朝夕陰の膳ハ排。指と折て日と暮へ。その消息をもち、ぬ尺顧
その風声のそして想ひ煩る。又この修験ヶ弟徳兵衛ハ義家の
双親早く亡て、その妻阿茂と乳臭兒と嫡親三口の過活よて、些
本銭るる木綿高買の牙僧ハ閑ま。加縷羅院去て後、實
母ハ己が家よいとて、阿茂と共に侍き事ぬ。さるる頃、忽然
として徳兵衛母子一般の異病と受て、悩まらる。毎日午後より悪
寒して大熱ハ発し。遍身疼痛りて、宛らも蠅蠅ハ螫る。こ
ぶと。異常痛風るるも。来り診ほどの醫ども一個として、什
麼の病因といふこととさる。あるが中ハ老切なる一醫熟察し、
兩個の病者ハ、礬水と飲し、生豆と食せて、験る。母

子とも慈美とうち食て此も腥うらぬ形容あり老醫これ
と看て。原来疑もぬき邪崇あり。中く藥石の治処は非ず
とつ。看病は在ぬ。凡葛の者ども膝とくめて。さもつらば
如何して佳人と議る。老醫いへらく。凡鬼注は加持祈
禱よて禳驅ことハ多う。されども何の邪魅とつふことと知
ぬ。バ。驗者もせん法はわろじ。足下達も聽もし。這葛土
御門家の内ぬる佐伯少進。入道一清軒といふ者。山陽道陰
陽師查の役者として下ら。萬代沼村の庄官は寓居
らう。が。その易断鬼神不測の妙ありと風聞せり。こまにわく
ま。と。那人は筮判と請て見ら。ぬ。根由も解まんと勸め
ける。徳兵衛ハ。ま。と。す。て。萬代沼ハ。僅半里。た。ら。ぬ。所
あり。朝醒の間ハ精神も行歩も常のよ。く。ぬ。ま。ハ。一。回。往。て。乞
てんと黎明とまらて。夫婦もろとも稚兒を携。萬代沼の庄
官が許よ至り。一清軒は謁て。自己母子が難病の状とほけ
敷。勤よその明断を請る。一清軒容易諾。即坐卦を起。ふ
山風盡。ぬ。得。たり。一清軒眉うち皺り。コハ。山風盡して。三毒
盤上よて相食の兆あり。熟卦面と味。ふ。よ。是。必。足。下。達。の
骨肉は。大。隱。匿。の。惡。業。ハ。做。し。る。その。天。罰。的。齋。ハ。中。て。て
り。狹。ハ。罹。る。る。り。その。惡。業。ハ。造。る。と。い。い。今。天。下。ハ。名
たる。有。道。の。大。賢。人。ハ。寬。の。罪。ハ。隨。さ。し。め。た。る。と。ね。は。ゆ。る。ぞ。
天道ハ善ハ福ハ惡ハ禍す。その賢人ハ天ハ應。人ハ順。ハ
國ハ富。ハ民ハ愛。さ。る。善。行。あ。る。ゆ。へ。上。天。心。ハ。應。た。る。徳。者。ハ

國ハ富。ハ民ハ愛。さ。る。善。行。あ。る。ゆ。へ。上。天。心。ハ。應。た。る。徳。者。ハ

本得...
清...
...

〇 夾在加保 卷六



左氏傳
周易本義



ミケタと凡愚の身として悪と興しその人々害と做したる
餘の殃はあまのそとが眷族に及ぶと全く天公の神惡深
る故なり。今茲の兆は擧げ不可毒崇るをとも。是下母子
とも早些那の賢人の冤と雪んと苦思深切ふらば。蠱の毒勢
稍緩つて一登時下官が家と秘たる法と修して。兩個の鬼
注が禳除て興せんといふ。自来老實の木綿屋徳兵衛これと
聞より信疑相半。含粘と申とや。先に茲考たまひ感激
侍る。雖然爰は一個の不審のい賤人が骨肉の者にかぎり
起先露不仁無道の惡行を做せしもの覺侍らすといひ
出さす。一清軒とや不消分説で。非學者論は愉とと
いへしあり。今徒に争論も詮ぬるべし。早く回りにて

母儀も量見玉へ中意事も出来まんといひ捨餘の来
客に應對しつゝ。この時とや請茲人夥集合。徳兵衛夫
婦は一清に對て厚く謝儀演一封の茲儀と措て起いづ
かくて徳兵衛の家を歸。母は一清が兆の説を語り。母と
一向不會せず。一清軒殿の易術は百斷百中といひ声言せ
ども。只此は不占得なり。先闔門にて試説見し。長兎の
伽縷羅院に虫も殺さぬ誠實もの汝達夫婦の孝敬厚に
か。この老が肉眼は眼より紫語ら。早午の貝吹比よむりて
例の寒熱去来りして徳兵衛と一時は遍身毒虫と啣る
かごとく。痛疼さて悶苦むこと常は倍せり。徳兵衛が妻の
阿茂は種々介抱して在し。やとらつ起し柳眉朝天眼血

○安光加保卷之七

點て罵ち。余と誰しうかり加縷羅院ふると。我痴はし
て只一途よ。孝養の爲よと。双親の遺體おる性命と代はし
知ぬことはいひぬがら。悪人の大逆よ荷擔し。精忠至善の
賢者と。我故よ寛の難よ苦めたり。その業孽輪轉を
て。報来て。死て。泥梨の地獄よ隨。劍山氷池の刑いさらふ
て。無量の苛責よ。苦むと。やよ舍身いざ我よ替りて。疾那
賢者の寛と雪せよ。とあらば罪障頓よ消滅し。冥府苦患
と解脫せん。コハ悲し。や火の車よ載て往ハ。あら熱や耐が
たやと。叫も敢ずお民ハ度と仰倒よたされて。半晌不省人
事。ざりり。母子ハ毒氣の和時よて。おの舉動お看よその
饒舌と聞て且驚且悲。今こそ一清軒が説と。と。露。ぐりし

遣ハごまハ。共よ深々明斷の。然取ると感。天明と待かぬ
使と馳て一清軒と請。一清軒轎よ坐て入来。徳
兵衛ハ礼。く出迎て草廳よ請。席よ額と突て。り。畏
妻お茂が死靈の附語を青天白日よ告。大人の明斷と符合
せ。ハ。よし凡人ハ。在ざし。と昨日の不敬と謝。小人母子
か邪崇と。よ禳除王ひる。時日と移さず。賢人様ハ雪寛
と議。ハ。んと慫慂よ請け。一清ハ徳兵衛が誠心。ハ。て
ふ。こと允がひ。や。ら。運。くの。俎豆と排。へ。燧火と點。せ。て。壇よ
登。て。ふ。く。丹。敷。を。凝。し。泰山府君の法。と。修。した。る。前よ
て。も。て。大。熱。祭。を。遍。身。と。や。痛。疼。出。ん。と。せ。し。例。刻。取。る。不。思
議。や。那。の。攘。法。の。奇。持。あり。ま。徳。兵。衛。母。子。が。蠱。毒。よ。故。に。退

○安九加保卷之七

〇七

散して。苦痛ハハの餘波も揚ずおぼして。心神爽ふと日比は
優りて覺ゆる。骨肉のものいさらぬ。坐は在りし。一擧合て
雀躍ことかきとせし。老母一清。對てその勞を謝し。今旦
ハ不念意侍りし。兒子伽縷羅院といへる。修驗士御門様
西國方隱陽師查の役。蒙り。俄に召きて。帝都より候し
が。一別弗。音耗を聞侍り。貴客ハ土御門家の御差使と
承りし。と。豚見と一般御任。定てその事知召さん
若ハ大人の御吹嘘。やあらん。昨日娘が附語。豚
見ハ黄泉客と。おししと聞し。老母。不小可ねり。乱て
侍る。とい。干係。問り。一清軒。詔。陰陽師
等の查差。ハ下官との惣裁判の蒙り。大ハ洲内。おぼし
干て。知りし。人。こと。おし。令郎の名。さへ。今が承り。初なる
小。そハ可恠。こと。おぼし。と。半晌沈吟。せし。掌。以。礎。と。うらて
呀。原來卦の兆。おぼし。令郎。いり。篤實の質。おぼし。人
の。為。欺負。して。罪。做。せら。む。計。ら。ま。ず。い。ま。ご。語。も
果。ざる。稠人廣坐。より。誰。ハ。い。ま。ご。と。大人の御語。よ。は。こ。て
思。ひ。得。世。事。の。い。頂。山。口。の。御。館。ハ。什。底。の。御。糺。明。一。個
の。修。驗。者。を。責。殺。し。給。ふ。由。適。間。の。風。説。と。う。け。た。ま。り
き。と。道。出。せ。る。か。る。時。の。習。し。古。怪。の。叟。と。い。ハ。這。家。の。伽
縷。羅。院。殿。平。生。の。口。吹。よ。己。ハ。命。薄。よ。て。斯。貪。寒。過。活。ハ。母。と
安。樂。よ。養。ふ。こと。遂。は。ず。あ。い。ま。今。世。ハ。大。金。と。損。し。て。命。と
買。ん。と。い。人。し。あ。ま。が。し。一。員。の。舍。弟。持。た。れ。ハ。母。と。看。顧。よ

散して。苦痛ハハの餘波も揚ずおぼして。心神爽ふと日比は
優りて覺ゆる。骨肉のものいさらぬ。坐は在りし。一擧合て
雀躍ことかきとせし。老母一清。對てその勞を謝し。今旦
ハ不念意侍りし。兒子伽縷羅院といへる。修驗士御門様
西國方隱陽師查の役。蒙り。俄に召きて。帝都より候し
が。一別弗。音耗を聞侍り。貴客ハ土御門家の御差使と
承りし。と。豚見と一般御任。定てその事知召さん
若ハ大人の御吹嘘。やあらん。昨日娘が附語。豚
見ハ黄泉客と。おししと聞し。老母。不小可ねり。乱て
侍る。とい。干係。問り。一清軒。詔。陰陽師
等の查差。ハ下官との惣裁判の蒙り。大ハ洲内。おぼし
干て。知りし。人。こと。おし。令郎の名。さへ。今が承り。初なる
小。そハ可恠。こと。おぼし。と。半晌沈吟。せし。掌。以。礎。と。うらて
呀。原來卦の兆。おぼし。令郎。いり。篤實の質。おぼし。人
の。為。欺負。して。罪。做。せら。む。計。ら。ま。ず。い。ま。ご。語。も
果。ざる。稠人廣坐。より。誰。ハ。い。ま。ご。と。大人の御語。よ。は。こ。て
思。ひ。得。世。事。の。い。頂。山。口。の。御。館。ハ。什。底。の。御。糺。明。一。個
の。修。驗。者。を。責。殺。し。給。ふ。由。適。間。の。風。説。と。う。け。た。ま。り
き。と。道。出。せ。る。か。る。時。の。習。し。古。怪。の。叟。と。い。ハ。這。家。の。伽
縷。羅。院。殿。平。生。の。口。吹。よ。己。ハ。命。薄。よ。て。斯。貪。寒。過。活。ハ。母。と
安。樂。よ。養。ふ。こと。遂。は。ず。あ。い。ま。今。世。ハ。大。金。と。損。し。て。命。と
買。ん。と。い。人。し。あ。ま。が。し。一。員。の。舍。弟。持。た。れ。ハ。母。と。看。顧。よ

事と欠ず、我の命と縮めても、親は不自由がさせしおしと
謂らむた。骨だの肩は、聳してのきり。又ある農戸が
加縷羅殿ハ前日出村茶屋にて生ぬ醫者殿と坐久對話
せらむ。一包の金子とも拿歸らむ。見つけぬ
ぞあや、いられと店小二がはぶやとた、と居夫高はねて云
さいぐ。母ハ適間より六の種々の言説を聞て、鞞し胸をぐり
餘の悲は涙こへ出しやらざる。齒の透と漏声のいと溢枯て
さらばその責殺とまじり、優婆塞ハ極て豚兒の加縷羅院
おらん。母と養ふはんとの健氣ぬる誠心も、いづも孝行おまを
して、命と活としやうふらふとあつもの、とい知らむして
中く、珍膳美食も兒の肉見ると可惡聞も否。今の世

此へてハ、錦の襦も、鐵の進、ふとが安樂とみろや。残喘も
たの母も、刹那は運つぐぞよ。情ぬき長兒がみろや。孝行の
へつて不孝とありしぞ。且も門と出し、ふとぬく。その
後影の透て、物哀の想い、い、ゆる憂目ハ看ん識。ふとハ
想ハ、慘酷やと、展轉て泣悶く。徳兵衛夫妻も共泪と
そとがりて母親と介抱種々と、耐り賺ちまば、流石老人の
例。後果も志残りらす。徐く涙と飲て、一清軒が膝方に
躡り。既然死者ハ悔えて回らす。や、徳兵衛汝ハ七
魂ハ托語たる悪人むらの隠謀と顯し、賢人様とやらん
の寛と雪し、まいらせよ。亡兒が為、いことよ。優る供養ハ
あら、いざ早く冥府の苦患と助や。又眼底ぬる仇と

報いとし。およと一清大人雨せんは何如しして可ん。その
 風状はなるべき志と成。次児はよふな委く訓へて給はまこと
 只顧たのむ。一清いふと成うけがひ又互卦ふごと併せ考へ。
 徳兵衛と近づり先方位は這里より東方はあたりて程近
 大都會と見ちと極てふま山口あり。そのあまが早く山口の
 揆斷所は出訴と成して令郎の命と活きたる縁由と三票
 對手の検査を願ひまふ。必勝利うごひはし。その所以は山
 風蠱といふ卦ハ内卦ハ風外卦ハ山なり。往古周の代は秦伯
 といへる諸侯あり。その國の東は隣る晋といふ國と討んとて
 筮してふの卦と得たり。秦伯こを見て蠱ハ忌しむ兆なり
 と。今度の軍まづ止人と議せらる。易者曰や。吉し

時今秋ふまハ西より東より之は利し。外卦の山ハ内卦の
 西風吹中て。その山の枯葉と吹散す象ふまハ極て御勝
 利あるべしと斷せしむ。秦伯これ同意して晋に討て
 大に克と得らる。たるその例もあま。今足下の對手とら
 るべきハ十分猛烈なる大敵なり。その運數漸盡なり
 且山口府は這里より東の方より殊に今秋の末まは西風山の
 凋葉と吹掃をぞぐ。速う玉成べし。如あまこと其間ハ不意
 驚駭は奏巧ふとあらん。不妨ぬことあり。そいふと勿惟の僥
 倖と成り。その事よりして令兄の屈死の縁故も明白賢人の
 雪冤て世に出らまて足下もや。その人の庇は由好造化か
 遇るべし。かふらと疑はる。あまと勿とそいつりける。

十八回 狩

雲ハ龍ニ從グヒ。風ハ帟ハ從グヒ。明君ト賢臣ト一時ニ詩
 遇ルこと。世ニ希有例ナリ。大内介満興朝臣ハその初猛烈の
 君ナリシ。一回駒澤ヲ諷諫ガ容ヒさせ給ヘリ。遂ニ武文兼
 備の名將トハナリたまひ。さきバ駒沢ニ學ビ得ラま。さ
 政要ども已ニ所行トて。分國の軍民總テその御仁澤ニ浴
 するふとい知召ト猶且ハ渠ニ授メける兵法の機變を試ム人ト
 俄ニ仰出たま。三田尻の奥ニある猛虎嶺の裾野ニ射獵ガ
 催させたま。當日ハ介殿ま。夜深トニ館ト起行あ。ま
 御頭ニ翻花の裏箔の笠子ト戴ト猩々緋ニ蜀錦の玉縁
 ま。陣外套ト穿け背の小籠ニ。數の藪矢ト納。あ。ばら
 の行騰ト着月毛の駒ニ。躡。一。手ニ繁藤の弓ト會。せ
 ら。ま。て多聞樓の下ニ半胸立せたま。ひて前面ト屹ト眺
 望。したま。へ。侍衛の人。く。い。さら。り。陪從の士。太夫次。叙。ふ
 准。て。歴々ト綺羅星宿のごとく。蹲踞たる。軍馬とも。此
 の。声。响。と。さ。へ。傲。さ。ず。い。と。森々ト。嚴。肅。と。る。状。ハ。洵。ニ。あ。れ
 紀。律。の。中。度。ぬ。ら。よ。由。と。お。は。れ。也。駒澤ハ希代の軍師ハ
 暗。々。称。哥。在。し。て。その。ま。く。腰。ぬ。る。軍。配。扇。ト。抽。と。て
 御。額。ニ。翳。し。給。ふ。この。太。骨。の。消。金。の。扇。ニ。朱。の。日。輪。ト。抽
 たる。ニ。恰。好。東。の。天。より。に。登。は。く。う。ら。句。へ。る。嫩。紅。の。影。ト。相
 映。て。目。し。綵。ぬ。る。ま。で。暉。く。ぞ。ぞ。え。たり。這。ハ。改。觀。ト。看。る。もの
 あり。或。ハ。好。奇。こと。傲。した。ま。よ。と。冷。語。もの。も。あり。て。一。軍

總て恠駭うぬものもねりりる。大内より殿はやとら手納ひ
り徐々騎歩給ひりる。猛席嶺の山脚まで三里餘の路
上孤苑も武者押のどく。隊伍整くして聊も乱も同ひと
ふとねし。かくて設の御假屋に入せらまて。霎時御憩息の
らせらまぬ。登時午影戴笠あまばとや御晝飯喫しり
うらんと隨駕ぬる長臣輩、駒坐の光景と覘奉るに
殿ハ将ルよ坐まらば。御手自佩糧として小くやりぬる漆
包と披せらまらる。只焼飯と香漬と乾肉梅とのまら
殿ハことと甜美と喫させ給ひ一杯の馬柄抄の水と飲せ
らまてとてたるを見より人々呆まるとし。且慚且怖で齋
せ来り行厨ハ美味を悉せしふとねまば。君前よ出す

ふとかるはず。個々たぐ空腹を抱て躊躇居るこそ殿ハ最
怖しと思し。汝等什広故に午飯と喫べずし猶豫居ぞと
曰ハするよ。冷泉帶刀衆よ抽て臣等が輜餉へまら来れはずと
票あく。殿聞し召まて。そハこと迷惑るべし。と即近臣よ命せ
しけられ。臨時御豫慮の準備せさせたまはる。佩兵糧とも瓜
穀し運びせさせらまて。人々領與へ給ひりる。人々感激と謝
票あけていと珍らしくも粗食とねん喫べる。因よふ後未ある
卯月の初つと。櫻川の水に環翠が潭といへるふし魚を催せ
たまふ。這櫻川の濫觴ハ山口の北畔ぬる曙山弥勒が嶽。高麓
山し落合て巨浸とねし。外郭の左側を流る。大河より北先ハ
みの川年々洪水溢と兩岸の隈ども那邊這方決て。活可の龍

畝と壊けるゆへごとよ煙へる邸落ハ殃と被ること不卜可かれ
ハ河破ハ左右の隴畝より高きあし幾大餘よよぶるに
駒澤次郎左衛門の禹功と役ハ蒙りし小ずら源なる彌勒が嶽
の赤元よ雜木植まじ曙山望高麗山の伐疎たふ間よも
萬千の樹と植副以後て拙父撫者の入ととを堅禁せしむ
那の諸山年々經て藪蕙と繁きたり卑ぬあまらたりよ三
伏の日ハ雲氣凝濕して時とふく白雨と降りたるゆへそれよ
アハ更よ早損の患あることおろし又源流より土砂のくげま
ふぐることららぬハ大雨後水の激勢よ從て自然河底鑿鑿通
て當初のごとく底深くおろし或ハ駒澤よ問て曰く足下
の治河せらるしより修堤へち早く成さるるのよまらす二面

決壊とともさハ比類なき手段ありと深く感服たるよ駒
澤道やう在下として別よ奇き策も侍らば唯その各處の父
老ども才勤ある者ハ簡をまぐつよよ仕て令とぬ侍ア
しより父老ども告よハ明日の公役ハ馬踏と修らハ土ヲ作
ぬまバ人夫ハ何の村よ充させたまへとつよ又その明日ハ根廻リ
と堅むるか作ふま某地へ出夫ハ觸させ給へとつよよそま
等指せる處の民と役使ハ極りて成事くづらよせとけるハ
耕耘るよ熟せるものと夫ふより石材木など搬運ハ山手
の砕石かどよ馴たるものと使ハ空作と做さぬゆへよ若あり
けんと對へらよまきよとてハ大内介殿ハ環翠が澤よ赴りて
まよ舟行ハ潮涸て迂遠ハ例の御馬よ召よとてよやその地方

○法在如保 卷七

○十五

よ襟に見たまふ一那の環翠が潭とつゝハ大さやうなる猪不
雄手雌手の翠壁ハ宛も削り成ごごとく緑樹ハ弥が上
たちこめそまが間く白濁躑映山紅の類爛珊て美き趣
ありて画と描ともおよばど恠の巖の湾曲ハ紫の幕絞せ
たる大座船と繫ごてありらるへ御還の支度うりらる那里小嶋
あり方二丁むらりの芝生あり今日ハ日しよく暗て松ふく風へと
まどしよの時影の漢戸どもハ嫩鯉の群来りて瀑の汲を登る
こころぬ小柄細もて奥より流と出る残花と共に汲ひあぐる
よ業の好光景くまゝ潭底より大哘き鯉奥と尤右に掖
むさとして洄あぐるしありていと興ふりハ殿ハ芝生ハ五色の
花籠と敷せて銀の茶行團描金の携盒ども光線奪目よ

水陸の珍味ハ悉くあられ玉觥ハ盛る美酒ハ琥珀の色
とらん欺る酒酣ハ耳執り大内介殿尊意和暢ハ
夕日といはれこの松の下にけしとたけいとハ花さうりぬり
と口踊きたすひらきハ羣臣もまご随意ハ詩と賦歌と詠ハ
御興ととへ奉る小わざありらる殿ハ廣坐と流所たすい汝等ハ
川道遙の伴ふいねまに定て趣ある佳肴ども携来ぬらん此
憚らざしてこまへ出せどもまほしこまよと仰らるらん去れ
射獵のこまよ懲せしやへ今日ハぬらるはと大家相約る久如く
佩行厨まで来りらる今ハ嚴旨と承て個々面と着あせ半
胸頓口無言て慚愧ぬ殿ハ長臣どもが所為と御覽たすいて
笑容可掬玉ひしとこまらんハ殿の仕度しも詰たす

二内介殿
法希領の
射獵



安九加保
卷七

〇二六

〇安九加保
卷七

狂言
あし
四五



〇二七

御舉動おけれど漸内省して實是今日ハ寛く川漁の御遊
おろよ趣向せり下物と準備せざ刺軍役りのハ猪狩お出る
如く突元く打扮するを悔いられ今よりハ鬼ノ角ノ時宜の
緩急ノ用心なきこととておのれと羞想て殿の温和おる
御徳ニ化せらるるとねん是ハこと後話るれども筆の序に
記せしものおりかく閑話ノ絆りて原柄以説晩つこと
大内介殿ハ簾下と將て猛虎嶺ノ狩入たしよハ壯伎ども前
と争ひて馳躋る殿ハ萬般駒澤ヲ指揮のよく節制ありて前
日の未牌ノ下令せたましよ此日の昧早ハ列卒ノ指まさる
界隈の里民ハ跑聚峰々谷々ノ鼓うち噪時々閑と流
くくおどて驅逐おししハ扈從の侍ハ器械として野猪兎鹿

も過完て廻の後ハ後押の一隊のくと見えしハ羣聚の者ハ
四分五落ハ散らる事有湊巧萩野祐仙も今日の扈從の
後ハ在るる行次遅て漸只今この處と經過くると彷徨居
たる徳兵衛ハ後背より徳兵衛あまこそ前日令兄と伴おる
人おくと指教の徳兵衛ハ聞より血眼よりりて走りて
矢庭ハ祐仙ハ腕と捉へ和玉ハ前ハ家兄の伽縷羅院と伴
行まししハ什彦等の幹にて家兄ハ何處ハ居侍るや早く
在處ヲ謂まよと嘆くよぞ祐仙ハ喫一驚せしり不知状
小假作你ハ何奴まき余ハ向て傷觸を做すと我聊る記
得さし誤認ハ但ハ風魔まらりとカと極めて推跳すハ徳兵
衛ハむふやぶつことて放やらす千濊賊萬騙局ハ一罵合て

互に舌戦最中なるが山岡玄番の馬を驅りて押来この光
景と看咎れまゝと徳兵衛が罵る語とすゝるがハ身の上の
大事発まると即家卒と喝しそふ痴蒼の破隊も無状
漢駛く細まと令とれバ、跟随も重壓して條ち徳兵衛と捕
押へ高手小手は細ちが猿害ととめさせ已に胸勢より籠
て牽せぬ、茶店主人ハこの頭勢と看より肝と銷し、連累てハ
醒醒と足とも空は逃りたり

十九回 のり虫

秋の夕のたゞ暝は暮り山岡玄番ハややく已に邸に回直し徳
兵衛ハ内庭に牽出させ、呀祐仙其奴が懷裏と檢見よと
道祐仙波と應て徳兵衛ハ懷裡を扨探る果して一通の文
書のありけると奪持て山岡へ呈ぐまは、玄番ハ披き開て原来
原来こハ修験の屈死せる疑獄の訴状なり、恰好も奏巧
なるハ吾高運の做ところなり、匹夫ハ活置てハ後日の妨いで
一刀に截断せんと大の眼と念じ、發馬破佩刀と脱んとす
阿呀霎時侍王へ那下臈の、大官人直に御手と却とんハ
勿躰まゝ、小的が所置に任せ給へと声とかけて襖を披
出来るハ別人からず日外穿ぬ破まで逐電したる豹藤内ハ
て蚤うこの邸に舎匿居たるる、六の時豹藤内ハありあり
と把もあへず、徳兵衛が背より鬨よりけて策徳兵衛ハ其儘
阿と叫びて俯は作ると、連に畳きて隆くといと折は、鮮
血滾くと九死幾し、逆に出憐むべし、一點無罪の良民かく

山岡が非道の為、一朝草葉の露とぞ消ゆる。豹藤内うち
 密語、この屍の捨や、如くせばよろめりと議、玄番九うら
 頭藤内、倣得、汝よきと計へと道、浩處夥の了頭ども、慌忙
 出来、相公早く内房へ入せ給へ、今日ふん和子君、物怪の附て
 侍るよと、喘吁、玄番九大、駭き直、帳内と望、一烟走、
 跑入ぬ、大とハまら、とて、駒澤次郎、九衛門、春雄、不料、火
 難、御不審と蒙、當分、冷泉、帯刀、預けられ、
 い、傾と只、閉籠て、どあり、伊人生、得天の、縦る、英才、され、
 策と、帷幄の中、運らし、勝、ことと、千里外、決す、い、ご、
 かく、閑居、在、ふ、只、顧、治國の、為、は、ど、
 肺、臍、と、膈、は、
 夜、
 毎、仰、で、乾、象、と、規、る、が、今、宵、獵、り、回、来、る、東、主、帯、刀、と

大
 水
 あり

(6)

水

